

# 現代インドにおけるガンディー思想 ——スワラージピートの実験——

宇野彩子

## 序

マハートマ（偉大な魂）と呼ばれた、モハンダス・カラムチャンド・ガンディー（1869-1948）はインド独立の偉大な指導者として日本でも広く知られているが、ガンディーがその悲願を徹底的に踏みにじられた失敗者であったことはあまり知られていないように思われる<sup>1)</sup>。ガンディーの悲願とは、ガンディーが1909年に書いた『ヒンド・スワラージ、インドの自治』<sup>2)</sup>で描いているが、インドの人々、さらに世界の人々が「スワラージ (swaraj)・真の自由」を獲得することであり、そのために自分のこれからの生涯を捧げる覚悟であると結んでいる<sup>3)</sup>。

この「スワラージ」とは何か？言葉の成り立ちとしては「スワ」は「我・self」、「ラージ」は「支配・rule」であり、「自治」「自立」そして「自律」などを前提とした「自由」であり、ガンディーがその言葉に込めた内実は深く、単純ではない。にも関わらず、今日「スワラージ」という言葉で最も広く使われているのは「独立」、それも「インドの」という限定的な意味である<sup>4)</sup>。例えば身近な英和辞書で swaraj を引いてみると、「[インド] スワラジ、自治、独立」と説明されている<sup>5)</sup>。そのように限定されるのであれば「スワラージ」は現代日本に生きる私たちに無縁なものとなってしまうであろう。

そうした一般的な見解に対し、ガンディーが『ヒンド・スワラージ』に描き、その実現のために生涯を捧げた「スワラージ」は、インドだけでなく、過去のものではなく、世界で今、最も必要とされているメッセージである、という確信に突き動かされて、インドで20年以上にわたって地道な活動を続けているのがスワラージピート財団 (Swaraj Peeth Trust)<sup>6)</sup>である。スワラージピートの「実験」は今日インドでの暴力的な状況のただなか（カシミール地方やビハール州）で育った若者たち (radicalized youth) に驚くべき変化を引き起こしている。その実験から私たちが学ぶことはとても多いであろう。その一端をここで紹介したいと思う。

スワラージピートを創設し、私財を投じて献身的に支えて来たのはラジーヴとニルー・ヴォーラー夫妻である<sup>7)</sup>。ヴォーラー夫妻は葛西實 ICU 名誉教授の40年来の友人であり、葛西教授と共にデリーのお宅を訪問してお会いして以来、私も20年以上の個人的な関わりに恵まれ、その関わりはICU ガンディー研究会へと広がり、私たちは共感を持って結ばれて来た同志である。

今回この研究ノートはスワラージピートの、まだ未完の「実験」について中間報告としてまとめたものである。主な資料としてはヴォーラー夫妻がインドで出版した活動報告書<sup>8)</sup>と、スワラージピートのホームページで紹介されている文書、石坂晋哉氏によるインタビュー資料、さらに今日にいたるまでのメールのやりとりから学んだことに基づいている。

### スワラージピートの歩み

スワラージピートのホームページによると、「スワラージピートはインスピレーションに満ちたマハトマ・ガンディーのヴィジョン、思想、そして方法を提示することを課題として1992年に設立された非営利団体である<sup>9)</sup>。その目的はスワラージ（最も高度な民主主義、あるいは自治）のヴィジョンを様々な形の暴力との闘いの最前線にもたらし、これを目的としている。スワラージの自覚 (Swaraj awareness) を広げることこそが非暴力の文化を創造するための第一歩である。」<sup>10)</sup>と述べている。

「スワラージの自覚」を出発点として、スワラージピートの歩みは次の三期に分けることができるが、その歩みをスワラージピートの「旅路」(Swaraj Peeth's Journey) という言葉で表現していることは特筆されるべきである。その「旅路」の描写は、現代日本に生きる私たち自身の問題意識と重なるのではないか。

「スワラージピートの歩みは自分自身を問い直す旅である。それは暴力がますます権力や考え方や便宜主義のなかで影響力を増している現状に対して何とかしなければという促しを感じながら同時に不安や無力感に打たれている一般の人々の状況に呼応している。暴力が悪であるとか非暴力の素晴らしさについて述べたてるとは簡単であるが、実際に私たちを悩ませている難問は、どのようにして暴力に対して非暴力で対峙するか、ということであろう。暴力が深刻な場所で非暴力による実験がなされない限り、暴力への持続的な対処法は見つからないであろうし、人々の非暴力への信頼も再生することができないであろう。」<sup>11)</sup>このような問題意識から、一人一人との出会いを通して「スワラージの自覚」を求め、そこから歩む「旅」はスワラージピートを思いがけない方向へと導いていったのであり、決して最初から計画したものではなかった。

それでは三期に分けられるこれまでのスワラージピートの歩みを簡単に振り返ってみよう。1993 (1992) 年からガンディーの『ヒンド・スワラージ』のメッセージを共に受け止める仲間と指導者を探し続けていたヴォーラー夫妻は、そのたゆまぬ努力の末、サムドン・リンポチェ師の指導を仰ぐことができなかった<sup>12)</sup>。そして2001年から『ヒンド・スワラージ』に提示されている「スワラージ」のヴィジョンが今日のインドの一般の人々にとって意義があるのかを見出すために、『ヒンド・スワラージ』を共に読む、というスワラージ・キャンプを様々な場所で、様々なグループの人々を対象に行なった。それは基本的には何かを「教える」という姿勢ではなく、「対話」という形で行われた。それが第一期 (2001-2 年から2009 年) である。

こうした対話を通して明らかになったのは、『ヒンド・スワラージ』の「スワラージ・自由」のヴィジョンが今日のインドの人々の心に生きているということであった。今日のインドはグローバリゼーションのなかで成功を求めて大変早いペースで近代化を推し進めている。その華々しい成功の恩恵をこうむっているのはほんの一握りの人々のみである。そのような中で、インドの一般の多くの人たちは「近代的」で「開発された」「進歩的な」インドではなく、『ヒンド・スワラージ』でヴィジョンとして示されているようなインドのヴィジョンに深い共感を示した。それは互いに助け合い、調和があり、建設的な人と人との関わりを中心とした社会であり、基本的に非暴力によって作られるのであった<sup>13)</sup>。これまでガンディーの著作を読んだことがなかった人々がキャンプで共に『ヒンド・スワラージ』を読み、驚きをもって語った。「ガンディージー（ジーは尊称）は私たちが代弁して語っている！」<sup>14)</sup>

スワラージ・キャンプではインドの近代化による急激な変化に苦しめられていたり疎外感をもっている人たちが、ガンディーの言葉に触れて、これまで持っていたガンディー像を壊され、驚く。参加者が次の日には知人を連れてきて参加者が増えたり、最初は否定的な姿勢だった人が数日間にわたる対話で心を開いて発言していくこともしばしば起きたのだった。そして対話を通して、自分たちが日々直面している様々な問題を非暴力によって解決していくことへと目が開かれていく。こうしたスワラージ・キャンプはインドのムスリムの若者たちや、チベット難民の若者たち、ウツタル・プラデーシュの女性たち、ビハールの貧しい農村の過激な毛沢東主義者 (Maoists) たちをも変えたのだった。同時にそれはヴォーラーさんたちにとっても、スワラージの意味の再発見となった<sup>15)</sup>。

その過程で、二つの運動が誕生した。一つはガンディー・シャンティ・セナー（ガンディー平和隊）の育成プログラム<sup>16)</sup>であり、もう一つは9月11日をサツィヤグラハ誕生の記念日として非暴力を誓う日として位置づけ、世界に発信するという運動である<sup>17)</sup>。

第一期の経験を基盤に2009年から2012年をスワラージピートの第二期と位置づけている。この時期の中核に置かれるのは、1909年11月22日はガンディーが『ヒンド・スワラージ』をロンドンから南アフリカへ帰る船上で書き上げた日である<sup>18)</sup>ことから、2009年11月にその100周年を記念する国際的なシンポジウムをスワラージピートが中心となってデリーで開催したことである<sup>19)</sup>。

この国際会議「ヒンド・スワラージ100周年記念シンポジウム」には、インド国内だけでなく、世界各地で紛争や差別などの暴力的状況の只中で非暴力による解決を求めて運動している活動家や、ガンディー思想に深く共鳴して理解を深めようとしている思想家などが100名以上参加し、四日間にわたってお互いの「実験」の報告に耳を傾け、これからの世界的なスワラージを求めてのガンディー主義的運動 Global Gandhian Movement for Swaraj (GGMS) に向けての積極的計画について話し合い提案を作成した。そして会議の最終日に参加されたダライ・ラマ14世にGGMSの指導者となっていただくことが宣言された<sup>20)</sup>。

新しく生まれた GGMS においてスワラージピートはその事務局としての役割を担っていた。しかしスワラージピートの限られた力ではこの世界的規模の運動をゆるやかなネットワークとして連絡を取り合い支え合うことからさらに発展し活発にすることは困難であった。様々な限界に苦しみながら、スワラージ・キャンプでの非暴力に向けての対話や訓練が継続されていた。そして次第に、非暴力についての実験は、インドで最も暴力的状況におかれている地方の人々との出会いと対話へとスワラージピートを導いたのだった。それらの地方とは、1) カシミール地方 (Jammu & Kashmir 州)、2) ビハール州などのナクサライト (Naxalite) と毛沢東主義 (Maoist) など暴力による革命を信奉する極左過激派の影響下にある部族の村、3) 草の根の社会的・宗教的対立問題に苦しむビハールの農村であった<sup>21)</sup>。これらの様々な形での抑圧に苦しんでいる人々との出会いと対話は一度限りのものではなく、長い年月をかけて関わり続け、信頼を得るための大変な努力が必要であった。この活動が次の第三期へと導いていった。本研究ノートでは、紙面の関係でカシミール地方での実験の一端を紹介したいと思う。

### カシミール地方での「実験」

第三期については、様々な形で現在進行形の実験であるが、そこで最も重要なのは相手に真摯に耳を傾けるヴォーラー夫妻の姿勢ではないかと思われる。様々な不便や危険を顧みずに、実際に相手に会いにその地方へ足を運ぶ。それは常に face to face を基本にしている。例えば、最初にカシミール地方へ訪問し始めたのは 2010 年の夏にカシミール地方で 112 名のカシミールの子供達が亡くなった悲惨な事件のあとであった。現場に行ってそこで悲しみと苦しみを感じなければカシミールの現実を理解できないとわかったと述べている<sup>22)</sup>。

当初カシミールの若者たちはデリーから来たラジーヴさんたちを全く信頼していなかった。カシミール地方の現状は政治的対立が複雑でありにも厳しく、いつ誰に裏切られるかわからないと若者たちはお互いに疑心暗鬼になっていて、いったい誰に本音を語っても大丈夫か、常に気をつけなければならない状況におかれていたのだった。また、カシミール地方はインドの治安維持部隊に支配され、抑圧的な状況に置かれている。カシミールのムスリムたちはインドのマスメディアによって危険人物のように扱われ差別される場合もある。そうした不幸な経験から、デリーから来たヴォーラーさんたちも不信、そして人によっては憎しみの対象にさえなっていたのだった<sup>23)</sup>。

スワラージピートのホームページの報告、そして三冊の出版された報告書を読むとヴォーラーさんたちの生き方、姿勢一つ一つが真剣に試されたことが読み取れる。ヴォーラーさんは若者たちの様々な意見や立場の相違もそのまま受容し、彼らに「教える」という姿勢は決してとらず、何回もカシミールに足を運び、彼らの話に耳を傾けつづけたのだった。そうした試練を乗り越えて信頼を勝ち取った時に、驚くべきことに、これまで周囲の暴力に苦しみながら、暴力にしか打開の道を見出せなかったカシミールの若者たち自身が、互いに心を開

いて話し合う場をスワラージピートに見出したのだった。そして彼らがガンディーから学ぼうと自発的に『ヒンド・スワラージ』の読書会を行い、その内容について彼らが運営している新聞やメディアに記事を書いて紹介したことは、ラジーヴさんたちにとって大きな驚きであった<sup>24)</sup>。

さらに、ラジーヴさんと信頼関係で結ばれた若者たちを中心にして、カシミールの若者とジャンムー地方の若者の対話を行うことも実施された。ジャンムー・カシミール州にはカシミールというムスリムが多数を占める地域と、ジャンムーというヒンドゥー教徒が若干多数を占める地域、それからラダックというという特異な仏教の伝統をもつ小さな地域とに分かれるが、特にカシミールとジャンムーの間には敵対感情が深刻であった。それを象徴する出来事が1989年にカシミール・パンディットと呼ばれるヒンドゥー教徒のコミュニティが様々な暴力的抑圧や政治的策略によって、長く宗教の違いを超えて仲良く暮らして来たカシミール地方からジャンムー地方へと集団移住したという出来事があった。当時パンディット・コミュニティは一時的に避難したつもりだったようだが、その後の経緯で故郷カシミールに帰ることが困難になり、その多くはインドの他の地方や、場合によっては海外に移住したが、中にはジャンムーに残って難民のような生活に苦しんで来た人たちもいる。この事件はカシミールの人々にとって深い心の傷になっていた<sup>25)</sup>。長い歴史の中で、カシミール地方ではヒンドゥー教徒とムスリムは兄弟のように、分け隔てなく暮らして来た伝統があったのに、それを捨てて出て行って帰らないパンディットたちへの悲しみと恨みつらみが若者たちの親の世代にはあった<sup>26)</sup>。また、若い世代は、カシミールのそうした貴重な伝統を知らずに育ったのだった。

スワラージピートはカシミールとジャンムーの二つの地方の若者たちに互いに話し合い、理解し合う場を提供したのだった。彼らは対話を重ね2012年には共同宣言“A Joint Statement of Shared Concerns and Commitments: J & K Youth for Social and Cultural Harmony”を発表し、カシミールの暴力的な状況に対し非暴力によって和解と調和に向けて共に努力することを目標として掲げ、その名を「スワラージピート J & K」と宣言したのだった<sup>27)</sup>。

この対話の過程で驚くべきことに、カシミールのムスリムの若者たちがジャンムーに住むカシミール・パンディットの家庭に三日間ホームステイするという「実験」が実現した。最初この提案はカシミールの若者には過大な要求に思われたが、スワラージピートへの双方の信頼によって、この「実験」は実現したのだった。このホームステイの結果、カシミールの若者はジャンムーに暮らすカシミール・パンディット（ヒンドゥー教徒）の家庭で、あたかも自分の家にいるかのようにくつろぐことができたことに彼ら自身心底驚き、パンディット・コミュニティが彼らのふるさとカシミールへ安心して帰ることができるように努力することを自分たちの課題とするようになったのだった<sup>28)</sup>。

カシミールとジャンムーの若者たちの対話は、様々なメディアなどによって作られたお互いへの誤解を解くきっかけになり、数年後にはデリーでジャンムーとカシミールの若者が非

暴力を目標に掲げて話し合う会議に結びついたのだった。それは2016年4月1-3日にデリーで開かれ、参加したそうそうたる知識人たちからも若者たちの誠実な姿勢に賞賛の言葉が寄せられたのだった<sup>29)</sup>。

このカシミール地方でのスワラージピートの活動についてまだまだ学ぶことが多いのであるが、一つ特筆しておきたいことは2014年の9月にカシミール地方を襲った大雨による大洪水の際の活動である。洪水がおきた時、まさに刻々と水位が上がっていく恐ろしい状況の中から、デリーにいるラジーヴさんたちに助けを求める電話がかかって来たのだった<sup>30)</sup>。その洪水のニュースを聞いて、まずジャンムー地方のスワラージピートJ & Kのメンバーたちが率先してカシミールへの救済物資を集めて届けるというボランティア活動を展開したのだった<sup>31)</sup>。また、洪水に襲われた地域で、自分たちの命を危険にさらして孤立した家の人々を助けるために水中へと二人の仲間と共に飛び込み、泳いで150人以上の命を救った若者がいたが、彼はガンディー・平和隊のメンバーであった<sup>32)</sup>。仲間の一人は救助活動の最中に亡くなった。こうした行為はいずれも自発的なものであった。その後水が引いたが、まだ各地の混乱状況が続いていた9月末にラジーヴさんは現地へと行き、家が壊されたり傾いている人々を慰め、救援物資(one month ration kit)を配布したり、政府からの配給物資や支援金が届かない場合などには、直接担当者に掛け合った。こうした活動がスワラージピートへの信頼をさらに育てたのである。

最後に、スワラージピートが出版した三冊の報告書以降の状況について触れたい。2016年夏以来カシミール地方の政治的な対立状況はますます悪化している<sup>33)</sup>。その背景についてここでは十分述べることができないが、そもそも1947年にインドとパキスタンの分離独立(the Partition)以来、70年余にわたってカシミール地方は様々な勢力による争いの現場となっている。その複雑な状況を一挙に解決することは不可能に見え、また最近はとてもデリケートな状況が続いているようである<sup>34)</sup>。ラジーヴさんは政府や政治的組織とも距離をおき、公平な立場を堅持しているということから様々な立場の異なる人から信頼され、時にはインド政府高官にも直接意見を請われているようである。

カシミールの悲惨な暴動事件や抑圧的な政治は依然として続いている。そうした大変困難な状況でスワラージピートは約十年間かけて構築してきた人と人との関わりを通して彼らと共に非暴力的に平和を実現するために一步一步努力している<sup>35)</sup>。その苦しい現場からのラジーヴさんたちが深めてきたスワラージを実現する唯一の道としての非暴力への確信は現代世界にとって最も必要なメッセージであり、ぜひラジーヴさんを日本に迎え、face to faceで対話して共に学ぶときを持つことを切望している。

## 註

- 1) 1947年の南アジアの分離独立(the Partition of South Asia)はガンディーのヴィジョンの徹底的な否定であり、ガンディーは晩年大変孤独であった。宇野(徳田)彩子「一つの家族としての



人類意識——マハトマ・ガンディーとアブドゥル・ガッファール・カーン：二人の奉仕者』『アジア文化研究別冊 10 号』国際基督教大学アジア文化研究所、2001 年、62 頁。

- 2) ガンディーが 1909 年に思想的エッセンスを著した「マニフェスト」とも呼ばれる『ヒンド・スワラージ』は厳しい近代文明批判の書として知られる。最初はグジャラート語で書かれ、ガンディー自身が英語版を出版した。現在比較的入手可能な英語版は、M. K. Gandhi, *Hind Swaraj or Indian Home Rule*, (Ahmedabad, Navajivan Publishing House, 1938, (originally published in 1909)、および、A. J. Parel ed., *Hind Swaraj and Other Writings*, Cambridge University Press, 1997. バレルのものは大変詳しい解説と注がついている。グジャラート語からの日本語全訳は、『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』（M.K. ガンディー／田中敏雄訳）岩波文庫、2001 年がある。

『ヒンド・スワラージ』の近代文明批判が現代日本に生きる私たちの自己理解にも決定的な意味を持つという見解について、宇野彩子「マハトマ・ガンディーの近代文明批判と 3.11 以降の日本」『アジア文化研究別冊 20 号』、国際基督教大学アジア文化研究所、2014 年、67-81 頁でも検討している。この問題について今後もラジーヴさんたちとの対話を通して理解を深めていきたい。

- 3) Parel, 119. ガンディーが『ヒンド・スワラージ』で描いた「スワラージ」理解をその晩年まで堅持したことについては諸説があるが、インド国民会議派の次代リーダーであったジャワーハラル・ネール（独立後インドの初代首相）へ 1945 年に書かれたガンディーの手紙でも、そのヴィジョンは変わっていないと明確に述べている。Parel, 149-150.
- 4) ガンディー自身、「スワラージ」と「独立 “independence”」とは違うことを強調している。“The word Swaraj is a sacred word, meaning self-rule and self-restraint, and not freedom from all restraint which ‘independence’ often means.” M. K. Gandhi, quoted in the back page of *Nonviolence and Peace Building In Jammu & Kashmir (Observations and Reports 3, Gandhian Initiative in J & K)* (Rajiv and Niru Vora), Delhi: Swaraj Peeth Trust, 2016.
- 5) 『現代英和辞典』研究社、1973 年、1292 頁。ラジーヴさんは、Swaraj をインドの（政治的な）独立に限定して理解する傾向は、英語圏全般やインド国内でも強いことを懸念している。例えば Oxford Dictionary online で “Swaraj” を引いて見ると、“Self-government or independence for India” と書いてある。https://en.oxforddictionaries.com/definition/swaraj
- 6) Swaraj Peeth Trust: <http://www.swarajpeeth.org/>  
日本でスワラージピートについて紹介している文献はほとんどないと思われるが、例外として石坂晋哉「ガンディーの志を継ぐ者たち」『民族学』季刊 131、国立民族博物館、2010 年、60-64 頁は、2009 年までのスワラージピートの活動とヒンド・スワラージ 100 周年記念国際会議（後述）について紹介している。

石坂晋哉氏（愛媛大学准教授）は ICU ガンディー研究会発足当初からのメンバーの一人であり、2002 年に葛西教授と共にラジーヴさんに会って以来、ヴォーラー夫妻との対話を重ね、その内容を随時私たちの研究会で報告し、スワラージピートが出版した貴重な報告書も随時提供していただいた。石坂氏のこうした努力によって、私たちとヴォーラー夫妻とスワラージピートの関わりが継続され、理解が深まってきたことを謝して記したい。

- 7) Rajiv Vora 氏は 1947 年生まれ。父親は裕福な家の出身であったがガンディーの呼びかけに応じて家族と共に農村に行き、質素な生活を送り、ラジーヴさんも農村で育った。ガンディー主義に基づいた寮生活の学校で教育を受けたが、ガンディー主義から離れてインド音楽の勉強に

傾倒したり兵役訓練を受けたりなどの紆余曲折を経て、青年期にJP (J. P. Narayan, 1902–1979、サルヴォダヤ運動の指導者) と出会い非暴力による政治的活動に深く関わった。その後1977年にガンディーの著作集 (*The Collected Works of Mahatma Gandhi* の英語版。この著作集はインド政府がガンディーの死後刊行し始め、最終的には100巻以上にもなった) を読んだことが人生の旅の出発点となったと述べている。

Niru Vora さんはウツタル・プラデーシュ州の出身で、教育熱心な父親のあとおしを受けて高等教育を受け、その後アメリカに留学してMAを取得した。帰国後JPの運動に参加し、研究と社会活動の関わりについて悩んだ。その後デリー大学で博士号を取得し、デリー大学(中国語・日本語科)で教えた。

ラジーヴさんが1977年からガンディー平和財団(Gandhi Peace Foundation)に勤め、1979年に二人は結婚した(以上は石坂晋哉氏が2018年3月2日と3日にヴォーラーさん宅で行った「知的遍歴」についてのインタビューより。石坂氏が2018年4月14日に開かれたICUガンディー研究会でそのインタビューについて報告した際の配布資料を参考にした)。

ヴォーラー夫妻は二人三脚でガンディー思想を学び続け、スワラージと非暴力を中心に掲げてスワラージピートを設立し献身的に支えてきた。2007年2月にラジーヴさんはガンディー平和財団を退職して、スワラージピートの活動に専念している(2008年10月30日のメールから)。スワラージピートはインド政府からも海外の大きな組織からも経済的支援を受けないことで、自律性を保つことに細心の注意を払ってきている。

ICUガンディー研究会は石坂氏と愛媛大学の協力を得て、ラジーヴさんを2018年3月に日本に招く準備を進めていたが、ニルーさんの病状が突然悪化したために延期することになった。幸いニルーさんはゆっくりとだが快方に向かっている。現在私たちは2019年度中にラジーヴさんを日本へ招聘することを目指して準備を進めている。

- 8) 今回の研究レポートでは主としてスワラージピートがインドで出版した以下の報告書四冊を参考にした。その内容の一部はホームページでも公開されている。
  - 1) *Process Documentation 2002–April 2008, Hind Swaraj Dialogue & Gandhi Shanti Sena*, (compiled by Dr. Niru Vora and Rajiv Vora), Delhi: Swaraj Peeth Trust, 2008.
  - 2) *Shared Concerns: Swaraj Peeth Statements (Observations and Reports 1, Gandhian Initiative in J & K)* (edited by Rajiv Vora), Delhi: Swaraj Peeth Trust, 2015.
  - 3) *Disinherited Generation of J & K and Enigma of Kashmiri Pandit-Muslim relationship (Observations and Reports Series 2, Gandhian Initiative in J & K)* (edited by Rajiv Vora), Delhi: Swaraj Peeth Trust, 2015.
  - 4) *Nonviolence and Peace Building In Jammu & Kashmir (Observations and Reports 3, Gandhian Initiative in J & K)* (Rajiv and Niru Vora), Delhi: Swaraj Peeth Trust, 2016.
- 9) 上記の *Observations and Report 1* の最後に掲載されている“Swaraj Peeth Trust: A Brief”, 42によると、1993年に創設された、と書かれている。
- 10) “About Us”, from Swaraj Peeth のホームページ: <http://www.swarajpeeth.org/about-us/about-swaraj/>
- 11) *Observations and Reports Series 1*, 42.
- 12) S. リンポチェ師はインド、サルナートにおけるチベット高等研究所の学長を務め、グライ・ラマ14世の厚い信頼のもとチベット難民政府の首相という重責を担った。その超多忙な毎日の中で『ヒンド・スワラージ』を常にポケットに入れ、時間が見つかると読み直して生きる指針としているとのことである。

ICUガンディー研究会にとってインド人社会学者、故A. K. サラン教授のガンディー理解



は共有の出発点である (A. K. Saran, *Hinduism in Contemporary India*, Samyag-vak Special Series-X, Sarnath, Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2007)。サラン教授の著作集を出版するプロジェクト (現在 10 巻まで刊行されている) は S. リンポチェ師がサラン教授の著作の伝統的思想の重要性を認め、チベット高等研究所から出版して実現したものである。ラジーヴさんを葛西教授に紹介したのはサラン教授であり、リンポチェ師、サラン教授、葛西教授の共有する伝統的思想の視点からのガンディー理解はラジーヴさんと私たちにとって共通の課題である。このような関わりは与えられたもの (given) であり、お互いにかけてがえのないものとして意識される背景にあることを指摘したい。

- 13) ガンディーは最晩年に、理想的な社会のあり方として、ピラミッド (頂点を底辺が支える) のような社会ではなく、水面の水の輪が広がって次の輪にとけあって支えていく様に例えた。それは、ピラミッドの上部 (富や権力を持つ少数者) が下部 (その他大勢) を搾取する関係ではなく、各自が水の輪として中心をもち、その無数の輪が広がって海という大きな輪となり全体を構成するように (Oceanic circle)、互いに互いのために自らを無にしていく社会のあり方である。“Gandhi’s Political Vision: The Pyramid vs the Oceanic Circle (1946)”, M. K. Gandhi, *Hind Swaraj and Other Writings*, (edited by Anthony J. Parel), 188–191.
- 14) Swaraj Peeth のホームページから、“Hind Swaraj Discourses and Study Camps: Story of Experience” (written by Rajiv Vora, Oct. 17, 2001) の中で紹介されているがスワラージ・キャンプに参加したある女性がガンディーの文章を読んで “Gandhiji wrote on our behalf...!” と述べたという。
- 15) *Process Documentation 2002–April 2008, Hind Swaraj Dialogue & Gandhi Shanti Sena* でこうした第一期のスワラージ・キャンプの様子が詳しく報告されている。
- 16) Gandhi Shanti Sena は自分たちのコミュニティの諸問題を非暴力的に解決するために活動するボランティア組織である。スワラージ・キャンプに参加して得た自覚を出発点に、さらに非暴力的訓練を段階的に重ね、非暴力の誓いを立てて活動する。詳しい報告は *Process Documentation 2002–April 2008, Hind Swaraj Dialogue & Gandhi Shanti Sena*, 50–55.
- 17) 1906 年 9 月 11 日はガンディーが南アフリカ政府によるインド人をはじめとしたアジア系の人々に対する人種差別的法 (「暗黒法」) に対する非暴力的な反対運動を開始した記念すべき日である。この運動がその後「サッティヤーグラハ (Satyagraha)」運動と名づけられた。「サッティヤーグラハ」とは「サッティヤ」(Satya 真理) と、しっかりとつかむ (agraha) というサンスクリット語の二つの言葉からガンディーが作った言葉である。運動の中心は「真理」を目指すことであり、その特質は「アヒムサ」(ahimsa、非暴力) であることをガンディーは南アフリカでの生活で自覚した。サッティヤーグラハは政治的運動やその手段として理解されることが多いが、ガンディーは自分の生涯を通しての生きることのすべての領域での「実験」をサッティヤーグラハと呼んでいた。

近年 9 月 11 日はアメリカにおける 2001 年同時多発テロの日として世界で記憶されるようになった。このときテロに対してアメリカは非常事態を宣言し、テロに対する戦争を展開するに至り、暴力に対し暴力で対応することが正当化され、それがその後の世界の流れとなっている。このような中で、スワラージピートは 9 月 11 日はサッティヤーグラハ誕生の日であり、非暴力への信念を新たにするとしようと訴えかけ、ガンディー・シャンティー・セナーに加わる誓いの日としている。特に 2006 年 9 月 11 日はサッティヤーグラハ誕生 100 年の記念日であることから、暴力の道ではなく、非暴力の遺産を引き継いで行こうと広く訴えかけた。“Appendix 8, 9/11: Which One? Reclaiming Legacy” by Dr. Niru Vora and Rajiv Vora, in *Process Documentation*

2002-April 2008, *Hind Swaraj Dialogue & Gandhi Shanti Sena*, 105-109.

- 18) ガンディーが『ヒンド・スワラージ』を書いた背景とその内容について、葛西實「M. K. ガンディーと南アフリカ」『アジア文化研究 22 号』国際基督教大学アジア文化研究所、1996 年、193-207 頁。
- 19) このデリーでの国際会議（2009 年 11 月 19-22 日）に葛西實教授と石坂晋哉氏も出席し報告を行った。葛西教授は“Hind Swaraj as Life Line”（「生命線としてのヒンド・スワラージ」）において、出会いを通してスワラージのヴィジョンを与えられ、それが生命線となって日々生かされている現在について話された。石坂氏は大学で講師として 600 名以上の学生が書いた『ヒンド・スワラージ』のブックレポートを読んだ経験について報告し、数は少ないがガンディーのスワラージのメッセージを現代日本でも深く受け止める若者がいることを紹介した。

国際会議の後、ICU で『ヒンド・スワラージ』100 周年記念シンポジウム「歴史的地下水としてのガンディーの平和思想と行動」（アジア文化研究所主催、2009 年 12 月 19 日）が開催され、葛西教授、石坂氏に報告いただき、さらに長崎暢子龍谷大学名誉教授に「ガンディー運動の有効性——人は暴力をどこまで減らすことができるか」というタイトルで講演していただいた。研究会のメンバーである馬内里美氏を司会に迎え、参加者と共に現代日本における『ヒンド・スワラージ』の意義について考えた。このようにささやかな形ではあるが、インドでのスワラージピートの呼びかけに対して私たちも日本で受けとめる努力を継続してきている。
- 20) ダライ・ラマ 14 世はガンディーを師と仰ぎ、非暴力を実践する、現代世界で人類の良心の声として最も尊敬されている人物である。“Swaraj Peeth Trust A Brief” *Observations and Reports 1*, 43.
- 21) Swaraj Peeth のホームページ：“About Us”, “Swaraj Peeth Trust in its Third Phase (2010 onwards) is—” <http://www.swarajpeeth.org/about-us/about-swaraj/>
- 22) *Shared Concerns: Swaraj Peeth Statements (Observations and Reports 1, Gandhian Initiative in J & K)*, 2.
- 23) たとえば ‘Take Me to that Heaven of Freedom’ にカシミールでの集会に参加した若者が最初は自分の経験から否定的な姿勢であったが次第にラジーヴさんを信頼し、心から慕うに至る経緯が書かれている。*Nonviolence and Peace Building In Jammu & Kashmir (Observations and Reports 3, Gandhian Initiative in J & K)*, 18-21.
- 24) “Youth Dialogue on Nonviolence, Gandhi’s ‘Hind Swaraj’ in Kashmir: Part-1, Youth Leaders Affirm Nonviolence”, “Part-2, Radical Media Discusses Gandhi’s Hind Swaraj” in *Nonviolence and Peace Building In Jammu & Kashmir (Observations and Reports 3, Gandhian Initiative in J & K)*, 1-9.
- 25) Mushtaq-ul-Haq Ahmad Sikander, “The Separated Brothers” (Appendix-3 of *Disinherited Generation of J & K and Enigma of Kashmiri Pandit-Muslim relationship (Observations and Reports Series 2, Gandhian Initiative in J & K)*, 32-35. この記事は若者の立場から書かれた記事である。（2012 年 9 月 29 日に出版された）
- 26) 若者たちの親の世代の傷ついた心について述べた報告は、“Can’t be in Peace with Severed Limb” (Report of a Dialogue in Anantnag, Kashmir, 20 Nov. 2013) written by Rajiv Vora, *Ibid.*, Appendix-5, 39-45. ある年配の教師が、カシミール・パンディットの友人たちが故郷へ帰ってくることを悲願として待ち続けている気持ちを、「自分の身体の一部を奪われたままでは心の平安はない」と述べたが、これまでそのことを言葉にすることもできないまま心の奥に秘めていたという。
- 27) *Shared Concerns: Swaraj Peeth Statements (Observations and Reports 1, Gandhian Initiative in J & K)*, 11-15. この共同宣言にはラジーヴさんとニルーさんを含めて 28 名の署名がある。
- 28) この画期的な「実験」については *Disinherited Generation of J & K and Enigma of Kashmiri Pandit-*

*Muslim relationship (Observations and Reports Series 2, Gandhian Initiative in J & K)* が詳しく報告している。

- 29) GlobalGiving という世界各地の草の根のチャリティープロジェクトに広く募金を集めるインターネットサイトがあり、そこにスワラージピートは2015年12月に募金プロジェクト“Reclaiming Radicalized Youth in India”を出していた。その GlobalGiving からの報告メール（2016年5月25日付）でラジーヴさんは次のようにデリーでの会合について述べた。「32人のラディカルな若者のリーダーたちが互いに対立的な地域を代表してデリーに集まった。カシミール渓谷から13名、ジャンムーから18名、ラダクから1名で、そのうち6名は女性。暴力によって引き裂かれているこの地方に非暴力的な将来へ向けて一致しようと集まって話し合った。」この会議の重要性は参加した知識人たち、(アシス・ナンディーなど)も驚きをもって認めた。
- 30) “Kashmir Flood Relief 2014”, “Midnight Call: “We are drowning... September 2014” in *Nonviolence and Peace Building In Jammu & Kashmir (Observations and Reports 3, Gandhian Initiative in J & K)*, 69–71. 9月6日の助けを求める電話の後、停電などでしばらく連絡がとどえてやっと洪水地域とヴォーラーさんたちと電話が繋がったのは9月13日のことだった。ラジーヴさんは水が引いてきた9月の末に現地へ入った。
- 31) *Ibid.*, 70–71. 9月8日の夜にはスワラージピートジャンムーのコーディネーターは350人以上の若者を募って物資や毛布などを集めてカシミールへ送った。その後も寄付金や薬など集めた。このように自然災害が直撃したカシミール地方の人々へのジャンムー地方からの支援が迅速に進められたのも、洪水以前からのスワラージピートの働きがあったからである。
- 32) *Ibid.*, 74.
- 33) 拓徹「危機に瀕するカシミール」(メールマガジン「オルタ」155号、2016年11月20日)  
<http://www.alter-magazine.jp/index.php>  
拓氏はジャンムー大学社会学部博士課程で学び博士論文はカシミール・パンディットについて研究したとある。実際にジャンムー・カシミール州で生活し学んだ経験は大変貴重であり、まだお会いしたことはないがラジーヴさんが日本へ来られるおりにぜひ教えていただきたいと思う。拓徹「研究ノート 創成期の用語「カシミーリーヤット」について」『現代インド研究』第1号、2011年、159–176頁は、カシミール問題の複雑な背景について大変示唆に富んでいる。
- 34) たとえばラジーヴさんからのメール（2017年5月31日付）“Following is a recent incidence of a threat from LeT [“Army of Righteous”, Islamic militant organization] to youth leaders, who have taken to nonviolence as a result our engagement in Kashmir. Because of the vulnerability involved we are sharing this with some friends in confidence only to bring the point home that Kashmir is a multifaceted scene painted into one-dimensional image mainly by the media. Our experiment in nonviolence shows that the soil of Kashmir has other seeds too, only waiting to be nourished...”
- 35) ラジーヴさんをご自分の原稿“Understanding Gandhi’s Hind Swaraj” (未刊行)を私たちICUガンディー研究会のメンバーに送ってくれた(2018年1月22日付のメール)が、その最後の文章に彼の現在の心境が次のように語られている。「千里の道のりも正しい方向への一歩から始まる」。この言葉からガンディーの愛唱歌であったキリスト教の讃美歌“Lead Kindly Light”(日本語版では288番)の歌詞が想起された。巡礼者が闇の中を光へ導かれて歩きながら歌う、“One step enough for me.”